

スポーツ技術の習得に熱中する子どもを育てる教員
養成プログラムの開発：
NPO法人卓球交流会主催「キッズ卓球体験フェステ
ィバル」における学生ボランティアに着目して

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 和人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7147

スポーツ技術の習得に熱中する子どもを育てる教員養成プログラムの開発

—NPO 法人卓球交流会主催「キッズ卓球体験フェスティバル」における
学生ボランティアに着目して—

吉田 和人（学校教育講座）

1. 活動の趣旨と概要

子どもが卓球の楽しさを体験することを狙いとした NPO 法人卓球交流会主催のイベント（キッズ卓球体験フェスティバル）において、静岡大学の学生が、子どもたちの学びをサポートする場を設定した。そして、イベントに参加した子どもと、イベントをボランティアでサポートした学生の様子や感想、協働した NPO 法人卓球交流会のスタッフの感想などから、スポーツ技術の習得に熱中する子どもを育てる教員養成プログラムの開発について考察した。

キッズ卓球体験フェスティバルは、1月28日、29日、2月4日、12日、28日の5日間にわたり開催された。フェスティバルの進行は、静岡大学教員か NPO 法人卓球交流会専任スタッフのいずれかが行った。

参加した学生は、静岡大学卓球部員14名（教育学部学生4名を含む）、ボランティア募集の掲示を見て申し出た教育学部の学生6名であった。

参加した子どもは、33名であった。

それぞれの日の内容、参加した子どもと学生の人数は、以下の通り。

- 1日目：ボールとラケットに慣れよう（子ども：21名、学生：7名）
- 2日目：フォアハンドのラリーを続けよう（子ども：21名、学生：9名）
- 3日目：バックハンドで打ってみよう（子ども：17名、学生：9名）
- 4日目：フォアハンド対バックハンドのラリーを続けよう（子ども：21名、学生：7名）
- 5日目：ゲーム練習をしよう（子ども：18名、学生：8名）



写真1 3人でラリーを楽しむ子ども

2. 学生の感想

参加した全ての学生（20名）を対象に、アンケート調査を実施した。アンケートにおける質問項目は、「問1. 参加して楽しかったですか?」、「問2. また機会があったら参加したいですか?」、「問3. あなた自身にも有益でしたか?」、「問4. 今回の体験を通じ、今後身につけたいと思った技能や知識はありますか?」、「問5. 問4



写真2 打ち方の指導をする学生

で『ある』と答えた方は、その内容を具体的に箇条書きしてください」、「問6.その他、ご意見・ご感想があったらお願いします」、の6つであった。

「問1.参加して楽しかったですか？」に対しては、図1に示す通り、全学生20名中11名が「非常に当てはまる」、6名が「やや当てはまる」と回答した。教育学部学生10名の回答は、8名が「非常に当てはまる」、2名が「やや当てはまる」であった。これらのことから、大半の学生が楽しみながら参加していたことがわかった。学生が楽しさを感じた要因としては、「子ども達が楽しそうにしていると、こちらもうれしくなる」、「子どもたちに触れあうことが面白かった」などが多くみられた。

「問2.また機会があったら参加したいですか？」に対しては、図2に示す通り、全学生20名中10名が「非常に当てはまる」、8名が「やや当てはまる」と回答した。教育学部学生10名の回答は、8名が「非常に当てはまる」、2名が「やや当てはまる」であった。

「問3.あなた自身にも有益でしたか？」に対しては、図3に示す通り、全学生20名中10名が「非常に当てはまる」、7名が「やや当てはまる」と回答した。教育学部学生10名の回答は、8名が「非常に当てはまる」、2名が「やや当てはまる」であった。学生が有益であると感じた要因としては、「人に自分の考えを伝える大変さに気づいた」、「子どもとのコミュニケーションの取り方を学べた」などがみられた。

「問4.今回の体験を通じ、今後身につけたいと思った技能や知識はありますか？」に対しては、図4に示す通り、全学生20名中17名が「ある」と回答した。教育学部学生10名の回答は、全員が「ある」であった。

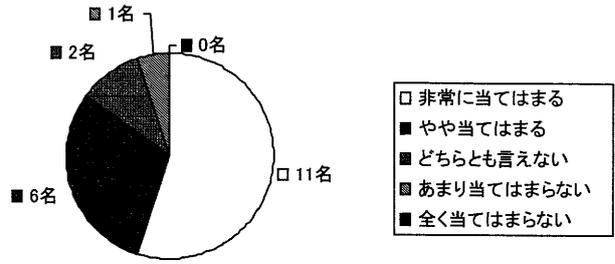


図1 「問1.参加して楽しかったですか？」に対する学生の回答

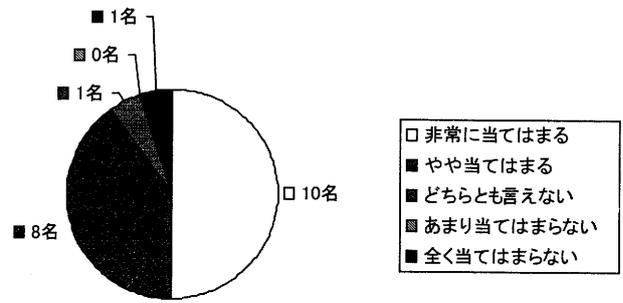


図2 「問2.また機会があったら参加したいですか？」に対する学生の回答

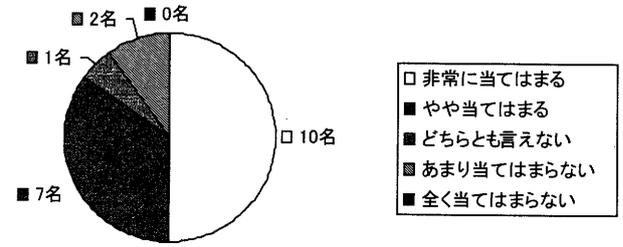


図3 「問3.あなた自身にも有益でしたか？」に対する学生の回答

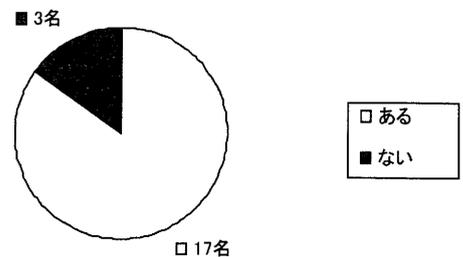


図4 「問4.今回の体験を通じ、今後身につけたいと思った技能や知識はありますか？」に対する学生の回答

「問 5.問 4 で『ある』と答えた方は、その内容を具体的に箇条書きしてください」では、「子どもへのわかりやすい指導法」、「子どもとのコミュニケーションの取り方」、「卓球の技術」などがあげられた。

「問 6.その他、ご意見・ご感想があったらお願いします」では、「子どもへの対応に慣れていないので大変でした」、「教育実習で学校に行く機会はあるけど、今回のような機会は初めてでした」、「これが単位になってくれたらうれしいです」などがみられた。

3. 子どもの感想

イベントの最終日に参加した子ども 18 名を対象にアンケート調査を実施し、17 名から回答が得られた。アンケートにおける質問項目は、「問 1.この教室にさんかしてどんな感想をもちましたか?」、「問 2.どんなことがおもしろくて、どんなことがおもしろくなかったですか?」、「問 3.ほかに思ったことがあれば書いてください」、「問 4.これからやってほしいイベントや教室があれば書いてください」、の 4 つであった。

「問 1.この教室にさんかしてどんな感想をもちましたか?」に対しては、図 5 に示す通り、17 名中 13 名が「とてもよい」、2 名が「よい」、2 名が「ふつう」と回答した。

「問 2.どんなことがおもしろくて、どんなことがおもしろくなかったですか?」では、おもしろかったこととして、「試合」、「ボールをたくさん打つやつ(多球練習)」、「スマッシュ練習」、「ラリーをたくさん続けられたところ」、「大学生から点をとったこと」などがあげられ、子どもによっておもしろいと感じる点は異なっていた。また、おもしろくなかったこととして、「ウォーミングアップ」、「(多球練習時の)ボール拾い」などがあげられた。

「問 3.ほかに思ったことがあれば書いてください」では、「スマッシュがうまくなった」、「バックハンドができるようになった」など、自身の上達に関するコメントが多くみられた。

「問 4.これからやってほしいイベントや教室があれば書いてください」では、「卓球教室」、

「卓球の大会」、「今回のイベントをまたやってほしい」など、卓球をさらにやってみたいという回答が多くみられた。また、「陸上」、「スイミング」、「サッカーのイベント」など、他のスポーツもやってみたいというコメントも多かった。

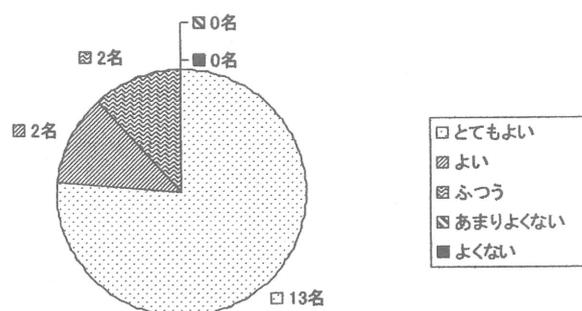


図5 「問1.この教室にさんかしてどんな感想をもちましたか?」に対する子どもの回答

写真3 多球練習で配球する学生と打球する子ども

4. 協働した NPO 法人卓球交流会専任スタッフのコメント

- ・参加した子どもの多くは、大学生と一緒に練習をすることや、話をすることがとても楽しいと感じているようだった。
- ・いずれの学生も丁寧に子どもに接してくれた。特に、ボランティア募集の掲示をみて参加してくれた教育学部の学生は、積極的に子どもに声をかけたり、誘導したりしていた。
- ・子どもたちのスポーツ技術習得のサポートとしては、今回のようなイベント当日の運営だけでなく、イベントの事前準備（参加者の募集、スポーツ技術の習得プログラムの立案、学習教材の作成など）に参加することも、有意義な経験になると思われた。

5. 成果と課題

子どものスポーツ技術の習得に関わることにより、運動の指導法に関する参加学生の学習意欲が高まった。特に教育学部の学生は、今回の体験を通して、全員が個々に学習課題をみつけていることから、この傾向が顕著であると考えられた。このことから、教員を目指す学生にとって、スポーツ技術の習得に取り組む子どもに関わる経験は、とても重要であると思われた。

子どもを実際に指導する際の学生の様子から、具体的な課題として以下の3点が考えられた。

- 1) 子どもがイキイキする場面をどのように設定するか。
 - 2) 模範演技ができない場合、子どもに動き方を伝えるためにどうするか（言葉、人体模型の利用など）。
 - 3) 子どもが、自分で技術・戦術課題を発見し、自分で学ぶためにどのように関わるか。
- また、地域との協働における具体的な課題として、以下の2点が考えられた。
- 1) 学生を受け入れる地域の組織の活動内容や指導力の検討
 - 2) 大学と、学生を受け入れる組織の双方に、メリットのあるような運営方法

今後、今回のような地域のスポーツ活動への参加は、スポーツ技術の習得に熱中する子どもを育てる教員養成プログラムとして、有意義なものとなると考えられた。

謝辞 本プロジェクトに対して、子どもたちの学びをサポートする場の提供や学生指導など、多大なご協力をいただいた NPO 法人卓球交流会事務局長山田耕司氏に、深く感謝の意を表します。

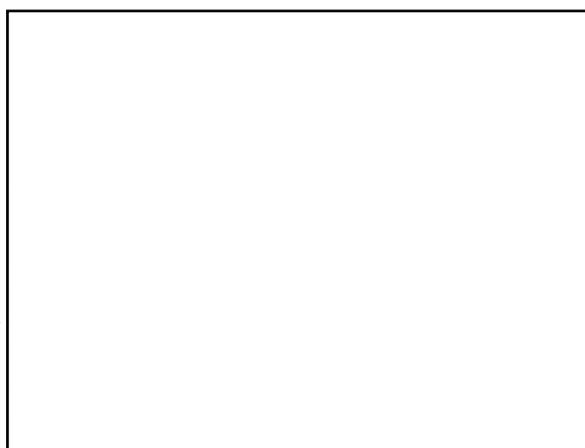


写真4 ポールつきをする子どもと指導する学生